

ベンヤミン 『歴史哲学テーゼ』 覚書

平野篤司

ワルター・ベンヤミンの絶筆『歴史哲学テーゼ』⁽¹⁾を読むことは、ベンヤミンの歴史に関する哲学的方法を知るだけでなく、思想家ベンヤミンの方法論の骨法に触れるとともに、それによって読み手の思考の枠組みが撃たれ、それを更新させずにはおかないほどのものである。わずか18章からなるテーゼは、アフォリズムふうの簡潔さと鋭さを兼ね備えているが、それだけで完結するにはあまりにも奥行きを持ちすぎているように思われる。それには野村修氏が指摘しているようにおそらく当時構想されていた彼の『ボードレール論』と不可分のかかわりがあるのだろう⁽²⁾。「このテ

-
- (1) Walter Benjamin: Die geschichtsphilosophischen Thesen この論集は、ベンヤミン(1892-1940)の死後1942年にアメリカの地において、アドルノらによってフランクフルト社会研究所からベンヤミン記念論文集が出された折、『歴史の概念について』“Über den Begriff der Geschichte”という題のもとに謄写版で公刊されたものである。全集版では、この表題を採用しているが、それがベンヤミン自身の命名ではないこと、およびその編集者たちも詳細な注解において、テーゼと呼んでいるように、こちらの名称のほうが原著者の意図をよく反映していると思われるのでそれを採った。なお、テキストの成立の経緯その他事情に関しては、全集版第3巻1223ページ以下に詳しい説明がある。当論文で依拠したテキストは、Walter Benjamin: Gesammelte Schriften Band I・2およびBand I・3 Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1980によるものである。本文中の引用は、これによる。
- (2) 『ベンヤミン著作集1 暴力批判論』(晶文社刊1969年)のあとがき解説による。特に140ページ

ーゼは、『ボードレール論』を書き続けるためのぼくの思考の一段階を示している」とかれは、盟友アドルノに手紙の中で触れているのである⁽³⁾。

『ボードレール論』とは、後に『パッサージュ論』と呼ばれる19世紀第二帝政下のパリをめぐる膨大な研究考察の成果である遺稿群のことである。これは、ベンヤミン自身「出来ることなら引用によってのみ構成される書物」を夢想したというが、その未完に終わった壮大な実践例である。実にさまざまな事物からなる万華鏡の宇宙である。これとは対照的に、歴史を対象とした思想上の主題の提示がまさに主題として簡潔に力強く主張されているのがこの『テーゼ』である。語りも直接的かつ強靱である。これらふたつの著作は、相俟ってベンヤミンの世界を構成しているのである。アドルノは、『パッサージュ論』の原稿に対しては、弁証法の論理が脆弱であるとして、かなり批判的な対応をみせたが、このテーゼなら受け入れやすかったかもしれない。これは、アドルノらの手によって日の目を見ることになる。いずれにしても物と理論の双方が弁証法的に媒介されてはじめて有機的な展開を生むはずであるが、アドルノはより思弁へと傾き、ベンヤミンは物自体へと強く引かれるという違いはかなり明瞭にある。

しかし、それにしてもベンヤミンの理論面での独自の強靱さも際立っている。それは、たぶん圧倒的なものの世界があつて初めて成立する主題なのであろう。ものを捨象することなく拾い上げることによってある主題が生まれ出るといったものである。この点を閑却しては、このテーゼは、教条的綱領的な主題提示と受け取られかねない。しかし、ベンヤミンの主題の展開のさせ方に即してテキストを読めば、その弊も免れることが出来るだろう。ベンヤミンの言語自体がそれを求めていることに疑いはなからう。そもそもベンヤミンの哲学的論考は、言葉遣いからして独自である。根源的な批判あるいは批評によって新たな世界を拓いていくものなので、ほとんどあらゆる概念が洗いなおされるといってもいいほどである。マルクス

(3) Walter Benjamin: Band I · 3 S. 1224

を中核とする歴史的唯物論に対してもその態度は変わらない。ベンヤミンが当時の左翼思想家たちの中で外延的あるいは異端的な存在であるとみなされたのには、そのような根本的な彼の性向があったためと思われる。また、ユダヤ教に根ざすメシア思想も彼の思考に決定的な刻印を記していることに間違いはない。われわれは、唯物論とメシア思想がベンヤミンにおいて独特な一つの構造体をなしていることに注目すべきだろう。以下、この観点のもとにベンヤミンの絶筆である『歴史哲学テーゼ』を一つずつ読み解いてみようと思う⁽⁴⁾。

I 歴史的唯物論

「歴史的唯物論と呼ばれる人形は、いつでも勝ちを収めることになっている。それが今日では知られているように矮小化され、人目をばはからざるを得ない神学を使いこなしている限りは。」⁽⁵⁾ (S. 694)

ここで使用されている神学という言葉は、たしかに異様である。啓蒙された近代人がとうに捨て去った古色蒼然たる宗教上の論理をあえて引き合いに出しているからである。唯物論に親しんだベンヤミンが宗教としてのユダヤ教に帰依していたかどうかは、彼の無二の学友ショーレムの友人に対するこの宗教への強力な働きかけの様子と反応を見ても明らかではない。ベンヤミンの側の躊躇というべき距離のとり方を見れば、実定宗教を信じていたわけではないだろうと思われる。しかし強い関心を抱いていたことに疑いはないし、彼の書き物にユダヤ思想の語彙や論理がしきりに出てくることも確かなことだ。おそらく、あくまでも世俗の人として唯物論とユダヤ思想を両極点とした独自の思想圏をたどっていたのではないだろうか。

(4) 各テーゼに表題は付されていないが、内容理解のために論者が小見出しを付けてみた。

(5) Walter Benjamin: Band I・2 S. 693

ショーレムに対しては、唯物論をはばかり、アドルノに対してはユダヤ神学をはばかりというのがベンヤミンの基本的態度であった。ベンヤミンにおいて奥行きとして、あるいはイメージとしてユダヤ思想の世界観に裏打ちされながら独特な歴史的唯物論は、展開されていくのである。この二つの論理が原理的に同じ思想の地平に相並ぶとは思えないが、そしてそれゆえにベンヤミン自身もその世界を友人たちに説明することに窮することにもなるのだが、この直接的には結び合わせ得ない両極を大きな電位差をもって接触させることによって、平面的な論理展開では得られない独自の弁証法的世界を実現させたのである。そのような世界に対する信頼感は楽観主義とは縁もゆかりもないが、揺るぎのないものである。

このテキストには、大きなテーブルのなかに、背むしの小人が隠れていて、紐で人形を操っていると書かれている。ここには、魔法や子供の話と思わせるトリックがあったのだ。ものの世界を救済するのはメシアであるうが、少なくともメシアのイメージは、ものの存在とともに揺らぐことはなかったと思われる。

II 過去の救済

「幸福のイメージには、救済のそれがゆるぎなく共鳴している。歴史の対象となる過去のイメージにも同じことがある。過去には時代別に新しい密やかな索引が付けられ、それが過去の救済を指示する。……（中略）……過去の幾世代の人々とわれらの世代との間に密かな約束があって、われらは彼らに待ち望まれて、この地上へと生まれでてきたのだ。」⁽⁶⁾ (S. 693-694)

(6) 野村修氏は、前掲晶文社版の翻訳において、原語 Erlösung あるいは erlösen に対して「解放」の日本語をあてておられる。それは、それで一つの確固とした解釈である。だが、当方としては、言語そのもののニュアンスもあるが、ベンヤミンの思想におけるメシア的なイメージの豊かさを

幸福感あるいは信頼感に満ちた現代人の過去とのかかわりが語られていることは否定しがたいと思われる。まるでエルンスト・ブロッホの生きる原理としての希望のような響きを持っているのではないか。これがIで述べたメシアのイメージであることに疑いはないだろう。希望の図式に揺るぎはないのだ。しかし、それにしても読み手が当惑を覚えるほど明確な幸福感ではないか。これが何に由来するかといえば、この主題がベンヤミンという思想家の基本命題というべきか、彼の使命感に裏打ちされたものだからであろう。それは、あいまいなものであってはならないのだ。ただし、ベンヤミンの言説がなかなか微妙なニュアンスに富んでいることを見逃してはならない。

「われらには、先行する世代と同じく、たとえかそけきものではあっても（下線部は原著者の強調）メシアの力が与えられているが、過去はこれに期待をかけている。この要求には容易に応えることは出来ない。歴史的唯物論者は、このことを良く心得ている。⁽⁷⁾」

過去を救済するメシアの力は、確かにわれら現在に生きる者たちに与えられているのだが、それは慎ましくもはかないものでしかないかもしれない。また、それが容易に実現するわけではなく、現実の戦いは敗戦に継ぐ敗戦ということかもしれない。しかし、いつの日にか過去の救済の可能性が拓けないわけでもない。しかも、それが可能なのは、地上のはかない存在であるわれらを措いてはないということなのだ。これは、単に悲観主義でも、楽観主義でもなく、過去に対する現在を生きる者たちに求められる使命感の表れである。現実が悲観的な様相を呈すれば却ってこのテーゼは強力に主張されなければならない。

生かしたいという希望から、宗教的な含意のある「救済」という語を取って使ってみた。

(7) Walter Benjamin: Band I・2 S. 694

Ⅲ 最後の審判

「人類は救済されてはじめて、過去を完全な形で自分のものにする
ことが出来る。それはこういうことだ。人類は救済されてはじめて、そ
の過去のすべての瞬間を引用できるようになる。人類が生きた瞬間の
すべてが、使用可能な引用物となる。その日こそが最後の審判の日
だ。(8)」

このテーゼは、おそらく社会的変革を念頭において書かれているのだろ
うが、やはりメシア思想と最後の審判というイメージが引き合いに出され、
宗教的な枠組みが設定されていることも事実である。そもそも人類の救済
はわれらが組み込まれている現在の課題であり、未来のものではない。ベ
ンヤミンにとって未来に憧れるということはないし、それは彼に幸福感を
もたらしはしない。現在時を構成するのはいま存在するものに違いはない
が、それは実は過去の痕跡であり、ベンヤミンの言葉遣いでいえば、廃墟
の風景である。日常の視覚には、現在時を取り囲むものは、有機的な世界
と見えても、これは歴史の勝者の見方であって、ベンヤミンのような危機
と結びついた批評的な目には、廃墟としてしか映らないのである。主題の
焦点は、断片として存在する廃墟としての過去に収斂する。

もちろん過去が現在と切り離されて、それ自体として観察の対象となる
わけではない。それは現在によって照射されてはじめて、有機性を獲得す
る可能性を持つのであって、それが現在時に生きるわれらによる過去の救
済すなわち人類の救済ということである。その端緒を開くのは、われらを
措いてほかにはないのである。人類は膨大な過去を背負ってしまっている。
リルケの『マルテの手記⁽⁹⁾』の語り手は、人類が幾世代もその過去を蔑ろ

(8) Walter Benjamin: ebenda

(9) Rainer Maria Rilke: Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge
Frankfurt am Main 1976 S. 726-728

にしてきたことにいまさらのように驚き慨嘆しているが、ベンヤミンのいうわれらも、遅まきながら一齣ずつ人類が生きてきた過去を取り返していかねばならないのである。この課題が果たされて、ようやく過去を生きたものとして取り戻すことができるのだが、その日があらゆることが明らかにされる最後の審判の日だというのである。きわめて神学的な風景というべきか、構図ではないだろうか。ひるがえって、現在時も、われらのそのように粘り強くも、果敢に実践される過去の救済という営為によって、はじめて空虚な時間たることをまぬかれるのである。現在は過去を救済し、過去は現在を撃つといえるだろうか。それほどに現在と過去の弁証法的相互関係は不即不離である。

しかし、ここで細心の注意を払わなければならないのは、それにもかかわらず、現在と過去は同一視されてはないということである。たとえば1960年代後半から1970年代前半にかけての世界規模でのベンヤミン受容のありようを振り返ってみるとき、ややもすれば同時代を語るための典拠としてベンヤミンが引き合いに出されるという傾向がかなり強く見られたと思う。しかし、この両者の間の径庭を認識することなしには、ベンヤミンを真に受け止めたことにはならないし、いくら鋭いとはいえベンヤミンという典拠によって当時の現代の核心を撃つことにはならなかったかもしれないと思うのである。時間の落差と過去に対する遠近法についての感覚は、ベンヤミンのうちには確かにあったのだから。

IV 向日性と不屈のしなやかさ

「階級闘争は、それなくして繊細にして精神的なものはありえない荒っぽい物質的なものをめぐる闘いである。にもかかわらず、階級闘争の中にも勝者の手に入る戦利品のようなものとしてではなく、繊細なものや精神的なものはある。ただし、それらは、確信として、勇気として、ユーモアあるいは策略や不屈さとしてその中に生きている。

……（中略）……それらは、支配者たちが手にした勝利のひとつひとつを疑問に付さざるを得ない。太陽のほうへと花が顔を向けるように、密やかな向日性によって過去は、たったいま歴史という東雲の空に昇ろうとしている太陽のほうへ、自分の身を向かわせようとしている。あらゆる変化のうちでも最も目立つことのないこの動きに歴史的唯物論者は、通じていなければならない。⁽¹⁰⁾」

このテーゼには、言葉による階級闘争家ベンヤミンの身体性に裏打ちされた精神の面目躍如といったところがある。彼の戦略は力による正面攻撃よりも、精神の柔軟で機敏な運動性にその特色がある。力による物量的攻撃力という点では、支配者たちのほうが勝っているのは確かだろう。これに対峙する戦略は、あえていえば搦め手からのものであって、確信、勇気、ユーモアあるいは策略そして不屈さということになる。現実的には、この戦いは苦戦を強いられ続けるであろう。だが、最終的な勝利に対する精神の確信は揺らぐことはない。たとえそれが最後の審判の日であろうとも。このあたりは、彼のもう一人の盟友ブレヒトとの精神的鞆帯と共鳴を深く感じさせるものがある。逆にブレヒトの言行を位置づけようとするとき、ベンヤミンとの共鳴を映し鏡として受け取れば有益なことが多々あると思われる。

確信と勇気がいかなるときでも、どのような状況でも不可欠なことに異論はないだろう。ベンヤミンの時代認識と歴史的唯物論についての信頼感が彼の思想の戦略を根底において支えているが、その確信の強さと言説の鋭さは、時代を撃つのに比類のない潜勢力を秘めている。それは、ヘルダーリンが危機あるいは勇気という言葉を使った場合と見合う力を持ちえたのではないかと思われる。ヘルダーリンは、「危険あるところ、また救済する力生い立つ⁽¹¹⁾」と歌っている。これなど、ほとんど捨て身の弁証法

(10) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 694-695

的展開と呼びたいほどだ。戦略という点では、ベンヤミンは、遊びの要素など付け入る余地もない精神の極限で詩作を敢行したヘルダーリンに比べれば、レトリックという点で余裕があるように思われるが、むしろ戦略という点での両者の精神の相似性を深く受け取るべきであると思う。たとえば、ベンヤミンが指摘したヘルダーリンの『詩人の勇気』とその改作『内気』という詩想の変化の問題である。この二つの詩の表題は、まさに同一の精神の両面を言い表しているのだ。また、同じくベンヤミンがヘルダーリンにおいて強調している特色、すなわち冷静さあるいは冷やすものということである。情熱と熱狂の詩人にこそ冷静がその基盤をなしていることを抉り出していて鮮やかであるが、これは同時にベンヤミン自身の精神を物語っているのではないか。ベンヤミンも時代に対する闘いという点で冷静さを自らに課しているのであり、それがユーモアやレトリックという表現としてたち表れたのだと考えたい。

しかし、それにしてもこのテーゼに使われている太陽と向日性の花という比喩は、微妙なニュアンスまで含みこんで過不足なくつつましくも鮮やかに開花している点で、ベンヤミンの絶唱であると思われる。

V 瞬間という現在時にかける

「過去の真のイメージは、さっと掠め過ぎ去るものだ。認識可能な瞬間にまさにさっと煌く一度限りのイメージとしてしか過去は捉えられない。」

現在時という焦点がますます絞られ、いまこの瞬間という時に収斂されている。この時は、長さを持つというよりも一つの点であろう。この点に、ベンヤミンの認識論の特色と過激さが窺えると思う。ベンヤミンの認識の

(11) Friedrich Hölderlin: Patmos

世界は、根本的に絵画的である。一瞬に立ち表れる世界は図像としてしかありえないからである。しかしこれほど過激な捉え方は、目の人ゲートをも凌ぐものであろう。ここにはイメージの出現以外には何もない。もちろんその後の論理の展開はある。だが、認識の生死を決定するものは、そこですでに決定されてしまっているのだ。これはその意味で絶対的なものである。これを捕り逃しては、真実の認識への道は閉ざされてしまうというのがベンヤミンの考えである。一様で持続的な時の流れを司るクロノスとは異なるカイロスのような一瞬の勝負なのだ。付言すれば、カイロスは、幸運をもたらす時の神格化ではあるが、運命、危機という意味の含みも持っている。人が首尾よくそれを捕まえることができれば、幸運に恵まれるが、それを捕り逃せば好機を逃したというだけでなく、決定的なものを失ったということになる。さらにはその時ひとは危機に陥るといっても過言ではない。だからベンヤミンによれば、ケラーの言明、「真理はわれわれから逃げ去ることはないだろう」という命題は虚偽ということになるのである。ベンヤミンの主張するカイロスの時間の観念には、幸福と危機の二つの契機が表裏一体のものとして含まれていることには十分注意しておきたい。

こうしたことをベンヤミンは歴史的唯物論という立場で論じていくのであるが、果たしてこれが通常の唯物論の世界に収まるものであろうか、非常に疑問だといわざるを得ない。ベンヤミンが批判してやまないブルジョワ的進歩思想はいうまでもなく、社会主義思想のなかにも近代的な時間の概念が根強く支配していることには疑いはないのだから。ベンヤミンが当時のドイツ社会民主党の論客たちを批判するのは、まさにその点においてなのだ。ベンヤミンによれば、一様であり平板で空虚な時間こそ、近代の時間概念に他ならない。いわゆる進歩思想も、直線的にあるいは自動的、機械的に歴史の時間が流れ、社会も含む人の世界は着実に進歩向上するのだという抽象的歴史観である。

しかし、ベンヤミンはきわめて具体的なものとして時間を捉えているよ

うである。彼にあっては、おそらく時間というよりも瞬間はそれぞれに異なっており、危機の意識の中で決定的な瞬間の到来に身を捧げようとしているのである。それがいかにやってくるのかについての説明はほとんど通常の論理を超えてしまう。しかし、その到来に対する感覚は開かれていることは確かである。そのようなものに対する彼の信頼感は、メシア的というほかないのではないか。たぶん偶然に身をゆだねるということにかなり近いものがあるかもしれないが、もしそうであれば、彼は偶然的なもの一つ一つにメシア的な期待感を持って立ち会ったといえるのではなからか。

ベンヤミンが過去の一瞬のイメージのたち現れに歴史認識の基盤を求めたことに疑いはない。アドルノに倣うわけではないが、その後の彼の論述を弁証法的のいうことができるかどうかということについては、問題があるだろう。しかし、ベンヤミンが精神と感覚を全面的に今という瞬間に投入し、捨て身の覚悟でその成果に賭けたことは確かであろう。彼の言説にみられる表現の目覚しい輝度、新鮮さは、その証であると思われる。

このテーゼで目指されているのは、やはり過去の救済という事業である。それは平板で空虚な論理や単純な因果律では、実現はおろか事実を把握することもできない。それは、イメージの微妙かつ強烈な出現を待つ以外にないのだ。もちろん、現在に生きるわれらは、その到来をただ待機するのではなく、過去の負託を受けてそれを鋭く自覚し、受け入れるべく体制を整えなければならないということだ。

「過去の取り返しのつかないイメージの中で意図されているのが自分自身であることを認識できなかった現在が刻々と過ぎ去るとともに、そのイメージは消滅しかねないのだ。⁽¹²⁾」

(12) Walter Benjamin; Band I・2 S. 695

VI 危機における救済

過去を歴史として捉えるというのはどういうことかという根本的な問題提起からこのテーゼは開始される。過去を認識者である歴史家から捨象してそれ自体として、あるいはいわゆる客観的に観察することは、始めから退けられている。そのような認識のありようは、客観的と人はいうかもしれないが、疾うに無効を宣告されているのである。それは、支配者が過去を現在とともに寿ぐことに通じるからである。支配者にとって過去も現在も危機などでありはしないのだ。これは、われらにとってまさに危機である。過去は現在とともに、そしてわれらの現在の意識で救済されなくてはならない。このような危機の意識が、真の過去の姿へと向かうことを可能にする。

「過去を歴史として明示することは、それがそもそもかつてそうであったように（下線部の強調は原著者による）それを認識することではない。そうではなくて、ある危機の瞬間に煌く回想を把握するということだ。⁽¹³⁾」

過去を考えるとき、それをイメージとして引き出すのは現在の主体の意識にほかならない。その時の意識は、危機によって圍繞されているはずである。「歴史的唯物論に求められているのは、危機の瞬間に臨んで思いがけなく歴史の主体の前に出現する過去のイメージを捉えること⁽¹⁴⁾」というのはそのような事情をいうのであろうが、ここで確認ならびに強調しておきたいことは、危機に囲まれた主体が同じく危機に瀕している過去のイメージを呼び出すということと、そして、いかに主体が過去の要請に対し

(13) Walter Benjamin: Band I · 2 ebenda

(14) ebenda

て自覚的であろうとも、そのイメージは思いがけず出現するということだ。主体の役割の不可欠なことと、過去のイメージがそれを不意打ちするということである。実に感覚的である。それこそが主体にとっての真の経験だというべきであろう。ここにはおそらく意識と感覚によるその意識の乗り越えということも関与しているはずである。この点では、ベンヤミンが特にその後半生シュールレアリズムに並々ならぬ関心を寄せていたこともあわせて想起すべきかもしれない。ベンヤミンの精神の動きには、過激なほどの主体性とともにそれに劣らず無私ともいうべき受動性がまるで表裏一体の要素であるかのようにいきいきと働いていることが注目される。

ベンヤミンは、このテーゼでは目覚しく戦闘的な姿勢を見せている。たとえば過去と現在の両者を脅かす危機について次のように述べるのである。

「危機は存在する伝統的なもの、そしてその受け手をも脅かしている。この両者にとって危機は同一のものであり、それは、支配階級の道具となりかねないということである。いかなる時代にあっても、伝統を我がものにしようとしているコンフォルミズムから新たにその伝統を奪取する試みがなされなくてはならない。(15)」

このような要請のもとでわれらは、「過ぎ去ったものに希望に火をかき立てる(16)」メシア的能力を発揮しなければならない。なぜなら「敵が勝利することがあれば、〈死者も〉同じく安心は出来ないから(17)」である。そして、現実認識として、「敵は相変わらず勝ち続けている(18)」ということをつ言することを忘れていない。このような危機の中でこそメシア的能力が試されるということであろう。

(15) ebenda

(16) ebenda

(17) ebenda

(18) ebenda

Ⅶ 歴史を逆撫でする

このテーゼでは、まず勝利者または支配者に感情移入する精神の惰性が論難されている。これは、それにしたがって過去に対して悲哀を感じたり、哀悼の念を抱いたりすることが傷ついた人々の心情を昇華させ慰安することに通じるだけでなく、それが同時に支配者にとって都合が良いことになることが指摘されている。彼らは、戦利品を文化財として引き回すというのである。ここからテーゼⅥで取り扱われていた伝統をさらに文化として捉え、その分析に入る。

「同時に野蛮の記録でない文化の記録は決して存在しない。……（中略）……そして、受け継がれていく伝統のプロセスも野蛮を免れてはいない。だから歴史的唯物論者は、可能な限り、人から人へと受け継がれてきたこのような伝統から身を遠ざける。彼は、歴史を逆撫ですることを自らの使命とみなすのである。(19)」

文化財は例外なく戦慄を覚えずにはいられない過去を持っていることが指摘されているが、これは、創造に関わった人々の言い知れぬ労苦への洞察である。アドルノの良く知られたアウシュビッツ以後の詩作の野蛮の指摘とは位相も状況も異なるが、これはこれでそれに劣らず戦慄を覚えずには読むことのできない一節である。驚くべきは、ベンヤミンの指摘が、文化一般あるいはその総体に向けられていることであり、そこに野蛮を感じ取っていることである。ここでわれらに求められているのは、勝利者の歴史の読み直しであり、過去のイメージに触発されたその転覆である。

さらにこのテーゼで記憶にとどめておくべきなのは、ベンヤミンが歴史的唯物論者を距離を保った観察者と呼んでいることである。もちろん、大

(19) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 696-697

衆を巻き込んだ支配者の陣営に対する距離ということであろうが、同時にベンヤミン特有の認識における冷静さという意味もあわせて汲み取るべきだと思われる。

VIII 非常事態、危機の認識あるいは認識の危機

このテーゼの始めで要求されているのは、「非常事態」が、実は非常ならざる日常普通の事態であることの認識と、これに対応すべき歴史概念の形成という課題である。危機の主題はテーゼVIで提示ならびに展開されていたが、ここではより尖鋭化され、焦点化されている。それはなににより、感知された危機を遠ざけるというような方向性は与えられず、むしろ「真の非常事態を引き寄せる」ことが課題として要求されていることに見て取ることができよう。この方法こそが反ファシズム闘争を強化するというのである。ベンヤミンの批判の対象は、反ファシズム陣営にも深く浸透している歴史に関する進歩史観であるが、それは総じて安易な楽観主義を信奉することに向けられたものと見ても良いと思われる。彼らが根強く浸されている進歩思想は、支配者のそれとは異なるかもしれないが、その観念における時間の均一性、抽象性、直線的、機械的進行などの特性においては軌を一にしているといえるのである。ベンヤミンによれば、それは人々に認識の端緒となるような驚きを与えない。彼は皮肉を交えて次のように語っている。

「われらが経験しているこんなことがらが二十世紀においてもまだ（下線部は原著者による強調）ありうるかというような驚きは、決して哲学的なものではない（下線部は原著者による強調）。それは、認識の端緒にはならない。もし、それが、そのような驚きが出てくるような歴史観は支持できないというような認識の端緒でなければ。」

われわれは、安易な進歩史観に与するのではなく、そこに内在する危機を深く構造的に捉えることから始めなければならない。これとメシア的救済思想は表裏一体を成しているはずである。

「最も望み無き者のために、われらに希望は与えられているのだ。⁽²⁰⁾」

(ベンヤミン『ゲート親和力論』)

IX 「歴史の天使」

この良く知られたテーゼは、パウル・クレーの「新しい天使」と盟友ゲルハルト・ショーレムの詩「天使のあいさつ」に触発されて描かれた言語による絶妙な造形芸術作品である。ベンヤミンは、「新しい天使」に自己投入しながら、それを精密に解釈している。おそらく読み手の深い自己展開と対象である原画の造形への凝視が相俟って、類まれなる新しい造形作品「歴史の天使」が生み出されたのであろう。

「新しい天使という題のクレーの絵がある。そこには一人の天使の姿が描かれてあり、彼は自分が見つめているなにかから、今必死になって身を遠ざけようとしているかに見える。眼は大きく見開かれ、口は開かれ、翼は広げられている。歴史の天使というのはこんな姿をしているに違いない。天使は顔を過去に向けている。ほくらならその目の前に一連の出来事の連鎖が見えてくるところに、ただ彼は破局だけを見る。破局は休むことなく廃墟の上に廃墟を積み上げて、それを彼の足元に投げつける。おそらく天使はそこに留まって死者たちを蘇らせ、壊されたものを寄せ集めて作り直したいと願うのだろうが、楽園より吹き付ける風があまりに強いので、その風が翼にはらまれて、もう翼

(20) Walter Benjamin: Goethes Wahlverwandtschaften Band I · 1 S. 201

をたたくことができない。その強風は天使を、それが背を向けているはずの未来へとどうしようもなく運んでいってしまう。一方、彼の眼前には廢墟の山がうず高く積みあがり、天にも届こうかというほどである。ほくらが進歩と呼ぶのは、まさにこの（下線部は原著者による強調）強風のことだ。⁽²¹⁾」

これほど対象と解釈者がそれぞれその独自性を維持しながら、一つに織り上げられた「歴史の天使」という図柄は、ほとんど奇跡的な造形物といわなくてはならない。「歴史の天使」は神と地上の人々の仲保者のイメージを持っていることは確かであろうが、限りなく人間に近い。仮にそれが人であれば、メシア的能力と志向性を授かったものであるに違いない。それゆえにこそ地上の人間は苦悩するのである。この天使は、地上の人の運命を全面的に担い、打ちひしがれそうになってもメシア的使命を果たそうとしているのである。ややもすれば、ベンヤミンその人の身の上を考えてしまいたくなるのは、飛躍が過ぎるだろうか。しかし、ベンヤミンのこの世界は、単に地上の諸関係に終始するものではない。それを神学的と呼ぶべきかどうかは別として、地上をはるかに包摂する広大な世界であることには疑いはなからう。

X, XI, XII, XIII 惰性的思考とりわけ進歩信仰を批判する

テーゼ X, XI, XII は、社会民主党およびその指導者たちの歴史認識と世界観を批判することに主眼があり、かなり論争的、攻撃的な文書となっている。ベンヤミンの批判は容赦を知らない。それは、反ファシズム闘争で倒れた者たちに対しても変わることはない。

テーゼ X では、進歩に対する信仰と大衆に対する素朴な信頼感が槍玉に

(21) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 697-698

あげられている。それらは、惰性的思考が生み出したものだと完膚なきまでに批判されている。

テーゼⅥでは、コンフォルミズムと社会民主党の俗流マルクス主義的世界観が俎上に載せられている。いくつかの観点があるが、やはり何よりも原理的には進歩に対する無媒介的信頼感に対する批判である。それは、技術の発展と工場労働とともに政治的成果とみなす結果をもたらす、労働の神聖化がなされ、その労働が資本家によって搾取されるという構造に適合的にはめ込まれ、労働問題がひたすら労働条件の改善という点に矮小化されるという事態をもたらす。技術の進歩は自然制御の進歩とほとんど同義であり、それは党によって認められた見解であるが、それと手を携えて進行する社会の退歩には目もくれない。そこでは労働の搾取ばかりでなく、自然の搾取もプロレタリアートの搾取とは対極のものとして積極的に肯定されてゆく。このようなベンヤミンの指摘を踏まえれば、社会民主党の世界観は、一種の近代主義であって、当時の支配層のそれと本質的に軌を一にしているといえるだろう。ベンヤミンによれば、これこそファシズムをさらに推進するものであった。

テーゼⅦは、同じく社会民主党批判であるが、短いパラグラフのうちにベンヤミンの面目躍如たるところがあるので、その点を指摘してみようと思う。まず確認を迫られるのが、歴史認識の主体が戦闘的な被抑圧階級であるという命題である。ところがこの大命題を骨抜きにし、裏切ったのがほかならぬ党だというのである。これは、党がもはや被抑圧階級のもではなかったことを示している。その指摘のさいにベンヤミンが強調する点には注目すべきものがある。

「党で学んだ階級は、ただちに憎悪も、犠牲への意志も忘れ去ったのである。というのも、憎悪や犠牲への意志の二つとも、隷属させられた過去の人々のイメージによって養われるものであり、解放された子孫たちというような理想像によってではないからだ⁽²²⁾。」

ここで看過してならないのは、憎悪とか犠牲への意志という感情的な含みをたっぷり内包した強烈な語彙の使用だけではない。それは、それでベンヤミンにあって抜き差しならぬ要素であることに間違いはないが、もう一つそれらの言葉が過去のイメージによって養われてきたと指摘しているところに留意すべきだと思う。これは、テーゼIにおいて触れた現在と過去をめぐる弁証法的関係というあらゆるテーゼを貫く主題的命題に連なるものであるからだ。ベンヤミンの批判するこの基本線を逸脱した歴史観には、もはや憎悪や犠牲への意志という人間的感情が入り込む余地はないのである。その世界観はますます教条化、硬直化の度合いを強めていくほかはない。

テーゼVIIIは、非常に明確な進歩思想批判である。ベンヤミンの批判は、この点執拗といってもいいほど倦むことを知らない。ここでは論点が三つに絞られている。一つは、人類そのものが進歩するという考えであり、二つ目は、止め処もなく完全性に向けて進歩を遂げていくという考えである。最後は、進歩というプロセスが自動的機械的に不可避的に進行していくという思想である。ベンヤミンは、この三つの命題の根底にあるものに的を絞って根源的な批判を敢行している。それは、時間の捉え方にかかわる。進歩思想は、均質一様で空虚な抽象的な時間の流れを前提としており、その上に展開するものだという考えである。ベンヤミンは支配者であろうが、それと対決するはずの社会民主党であろうが、彼らのよって立つ近代思想の持つ時間の観念を転覆させようとしているのだ。

XIV 過去へと跳躍する現在時

「歴史は構成の対象であって、その場は、均質で空虚な時間ではなく、いまという時に充填された時間が形成する。(23)」

(22) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 700

歴史において問われるのは、過去の問題そのものではなく、現在のことがらなのだ。ただし、現在はそれだけでは存在することが出来ないで、「過去を引用する」。その場合の過去は、「いまをはらんだ過去」ということになる。ベンヤミンによれば、たとえばフランス革命は「歴史の連続性から叩き出された」自覚的な古代ローマの回帰である。歴史認識の問題だから、過去が対象となるのは当然のことだが、このテーゼにおいてそれを凌駕するほど強調されているのは、現在時のかけがえのなさであり、それのもつ力である。一例としてわれわれの生きているいま現在を彩るモードが過去の衣装を引用することがあることを取り上げて、「モードは過去への、狙いを定めた跳躍」だという指摘があり、それが弁証法的跳躍へと転じる可能性にも触れている。

XV 時計を廃し、暦を蘇らせる

歴史的唯物論者にとって、課題は歴史の均質的な連続性を打ち破り、過去の鮮烈なイメージをたとえ一瞬なりと取り出すことなのだ。そのためには、機械的で平板な時の流れは、断ち切れなければならない。ここで日常の時を計る時計に対置されるのがフランス革命の際に導入されたという暦である。新しい暦ではあるが、暦という形式であるという点では、過去の暦を蘇らせたともいえるだろう。暦は天文学的、宇宙論的、自然的あるいは宗教的、文化人類学的背景があるはずである。そこまでベンヤミンは触れてはいないが、年毎に回帰する記念日など特定の日は、まさに回帰するという点で、復活の日でもある。過去と現在の交差する時点なのだ。暦の時間の特徴は、時計の機械的進行とは異なって、循環的であるということだろう。原理的に見れば、近代主義における時間の直線的進行に対して、過去と現在の交点が繰り返し現れてくる歴史的唯物論における循環的な進

(23) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 701

行が対置されているのである。このテーゼの最後に、七月革命のときの印象的なエピソードが引用されている。

「闘争第一日目の暮れ時、パリのところどころで相互には無関係に、だが同時的に塔の時計が射撃されるということが起こった。(24)」

XVI 立ち止まる現在

現在時の鋭い意識が時間の均質性とその空虚さを打破し、過去のイメージを引き出すことを歴史的唯物論が課題にしていることは再三述べたが、テーゼXVIにおいては、さらに現在時のもう一つのありようが指摘されている。

「歴史的唯物論者は、過渡期ではなく、時間がそのなかで立ち止まり停止した現在を放棄することはできない。なぜなら、(時間の)この把握の仕方こそ、彼が一人の人間として歴史を書いているほかならぬその (下線部は原著者の強調) 現在を説明するのだから。(25)」

立ち止まる現在、停止した現在は、たしかに時間の連続性を破ればこそ出現するのだろう。しかし、現在という時間を形容する語句として、「立ち止まる」、あるいは「停止した」というのは、どういうものだろうか。それは、単に時間の連続性を破る切断点であるとは思えない。さらに大きな広がりのある時間を感じさせてやまないからだ。そもそも、それらの形容語は、一見ベンヤミンの主張する歴史の弁証法のダイナミズムにふさわしくないようにも思えるのである。もちろん、ベンヤミンが彼が批判の対

(24) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 702

(25) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 702

象として俎上に上げている歴史主義者の提出する「永遠の過去の像」なるものに加担したなどということは論外である。では、過去というかけがえないものの経験を現在時において伝えるということが使命であるはずのこの歴史的唯物論者の妙に広がりのある静止的な現在時をどのように捉えればよいのだろうか。この議論は、次のテーゼⅧにおいてさらに展開される。

XVII 停止される現在

「(いわゆる)世界史の方法は、足し算であり、均質で空虚な時間を充填すべく大量の事実を動員する。これにたいして、唯物論の歴史記述の根本にあるのは、構成の原理だ。思考とは、思想の動きばかりでなく、その停止を含む。緊張に満たされた状態にあって突如思考が止む時がある。そこでショックが生じ、そのショックによって思考がモナドとして結晶する。歴史的唯物論者は、歴史の対象がモナドとして彼に立ち向かってくるところでのみそれに近づくのである。このような構造のなかで事が生起することをメシア的に停止させる徴を、つまり、抑圧された過去を(救済する)闘いのなかで革命の機会の合図を認めるのである。(26)」

テーゼⅧのこの引用部分は、ベンヤミンの論理展開のもっとも特徴的であり、鮮やかな軌跡の一つであろう。含蓄深い思想がこれほど着実に造形されているのを読むことはまことに驚異である。さて、テーゼⅧの続きであるが、立ち止まる現在、停止した現在がここでは、思考の停止を担うものとして位置づけられている。思考の停止とは、文中にあるようにたんなる活動の停止ではなく、その前提として、思考の究極の緊張状態が存在する。そのさなかで「突然停止する」というのである。これは、ベンヤミン

(26) Walter Benjamin: Band I · 2 S. 703

も親しんだヘルダーリンの詩法に現れる中間休止（ツェズール）に相当するものであろう。ある極限状態で、思わず息が停止する一種の真空状態である。しかも、それが突然、思いもかけず立ち現れるというのだ。これは、たんなる思考を超えた、身体的なもの、生理的なものと一体になった全体的な精神の表れというべきではなかろうか。驚くべき精神の状態である。しかも、そこに生じるショックが、思考をモノドとして結晶させるということに至っては、ベンヤミンも深い関心を寄せ続けていたシュールレアリズムのことを想起せずにはいられない。

また、過去がモノド化の対象とされていることに注目すべきではないだろうか。というのも、ベンヤミンが過去のもろもろの事象をモノド、すなわち充実した単体としての物としてみるのが、かれの歴史的唯物論ということに直結していると考えることができるからだ。この考えは、マルクス主義的な意味での歴史的唯物論とは相容れないものかもしれないが、十分に味わい深い芯を持った唯物論であると思われる。

VIII 回想における現在と過去の交差、そしてメシア思想

「現在時が、メシア的時間のモデルとして、人類の全歴史をひどく短縮して纏めるならば、それは人類の歴史が宇宙の中でとる姿とぴたりと合致する。(27)」

現在が過去との出会いによって、過去のイメージを受け取るのも、そして過去を救済することが可能となるのも、現在時（いま）にメシア的能力とメシア的時間が織り込まれているからなのである。しかし、もちろん、メシア的時間のパースペクティブは想像もできないくらいに長く、広い。それがいつどのように立ち現れるかということなど、予測など全く立たな

(27) Walter Benjamin; Band I・2 S. 703

いほどだ。そのなかで、ひと一人の存在は、まさにモナド的である。そのためひとは、歴史的唯物論者として、彼自身の時代が特定な過去のある時代と出会いを遂げるまで、自らのうちにメシア的能力が付与されていること、自らに過去の救済が託されていることに絶えず自覚的でなければならない。

しかし、ベンヤミンによれば、ユダヤ人には未来を探し求めることが禁じられており、そのかわり、律法と祈禱が回想を教えていたという。回想のうちに過去のイメージがよぎることがあるのだろう。また、預言者による時間の経験が過去と現在で同じものだという指摘も興味深い。回想の中での現在と過去の交差、これこそ未来を切り開く契機かもしれない。ベンヤミンによれば、ひとが思いを寄せることを禁じられていた未来は、このプロセスのうちに初めて見えてくるのかもしれないという。なにしろ、「未来のあらゆる瞬間が、メシアが立ち現れるかもしれない小さな門だ」というのだから。もちろんひとには現在という入り口から過去のイメージを引き出す以外に未来に与る方法はないのだ。回想といえば、ベンヤミンが翻訳を手がけたブルーストの『失われたときを求めて』や、それに何よりベンヤミン自身の『ベルリンの幼年時代』という鮮やかな現在と過去の交差による充実した回想すなわち時間の体験の記録があったではないか。